

長畝ふるさと通信



【2025年3月号】

■ 田植に向けて着々と準備しています



3月も後半に入ってようやく春らしい天気となりました。春霞なのか黄砂なのかよくわかりませんが、この時期特有の強風と曇天が続いています。トキやサギたちが耕耘を終えた田んぼに降り立って餌を食べています。

3月上旬から畔塗を開始し、連日トラクターの耕耘作業が続いています。

同時並行して4月から始まる播種に向けて、種もみの浸種や育苗ハウスの準備など連日フル稼働です。

また、昨年末あたりから周辺地区での稲作廃業者が目立つようになり、組合にも小作依頼や田んぼの無償譲渡などこれまでにない変化が起きている。米価が上がったからと言って手放して喜んでいるわけではありません。農地を守るために今、何をすべきか…責任重大です。



■ やっぱり最後は神頼み

地元の気比神社の祈年祭に参列しました。これまで収穫が上がらなかったのは組合長が祈年祭に参列していなかったせいだのご指摘を受けての事です。普段は神頼みなどしない主義ですが、今回ばかりはしっかりとお願いしました。これで今年は豊作間違いなしです。かしこみかしこみ、申す～。



■ JAの意見広告について

3月22日の新潟日報にJAグループ新潟が全面広告を掲載しました。「お米の価値を、見直すときがきた」と題して、消費者と生産者の「声らしきもの」を掲載しています。写真では小さくて読めないので全文をご紹介します。

お米が食べられない未来なんて、くるはずがない

「ここ数年で、光熱費、ガソリン、世の中のあらゆるモノの価値が上がってる。まず一番に節約を考えたのが食費。特に、お米の値上がりはかなりイタイ。毎日食べる主食なんだから、安く買えるのが普通だと思ってた。お米は栄養バランスが良いし、どんなおかずにも合うから、育ち盛りの子どもには、毎日ご飯を食べさせたいのに。」

「お米の価格が上がったから買わない。もっと安くするべき。」そんな風に考える人が出てきても不思議ではありません。しかし、よく考えてみてください。現在の価格でも、お茶碗一杯50円前後。その価格は、パンやパスタと比べて本当に高いと言えるのでしょうか？

お米は私たち日本人にとっての主食、お米は日本の毎日を支える力の源です。しかし、そのお米も食べられる量が減れば、生産量も減っていきます。生産量が減れば、いま当たり前食卓に並んでいるお米も、いずれは食べられなくなってしまうかもしれません。

だからこそいま、おこめの適正な価格を理解してもらいたい。当たり前食卓に並ぶお米ひとつぶひとつぶの先にある、生産者の工夫と努力を少しだけ想像してみてください。高くなったからと言って敬遠せず、もっと食べることで、お米の未来は守れるはずですよ。

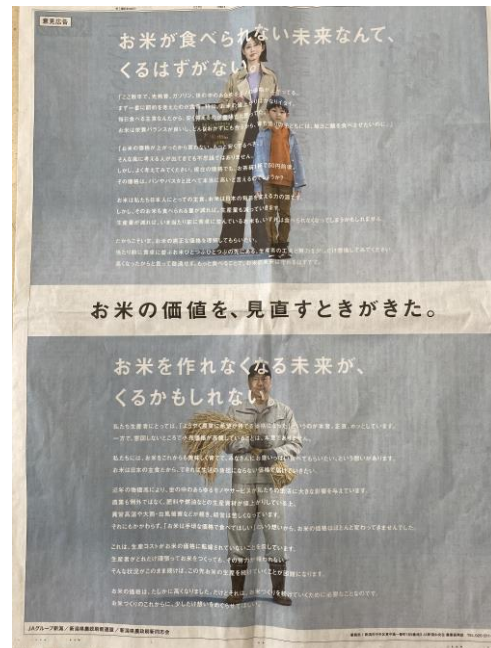
お米を作れなくなる未来が、くるかもしれない

私たち生産者にとっては、「ようやく農業に希望が持てる価格になった」というのが本音。正直、ほっとしています。一方で、意図しないところで小売価格が高騰していることは、本意ではありません。

私たちは、お米をこれからも美味しく育てて、みなさんにお腹いっぱい食べてもらいたい、という想いがあります。お米は日本の主食だから、できれば生活の負担にらない価格で届けていきたい。近年の物価高により、世の中のあらゆるモノやサービスが私たちの生活に大きな影響を与えています。農業も例外ではなく、肥料や燃油などの生産資材が値上がりしている上、異常高温や大雨・台風被害などが続き、経営は苦しくなっています。それにもかかわらず、「お米は手頃な価格で食べてほしい」という想いから、お米の価格はほとんど変わってきませんでした。

これは、生産コストがお米の価格に転嫁されていないことを示しています。生産者がどれだけ頑張ってお米をつくっても、その努力が報われない。そんな状況がこのまま続けば、この先お目の生産を続けていくことが困難になります。

お米の価格は、たしかに高くなりました。だけどそれは、お米づくりを続けていくために必要なことなのです。お米づくりのこれからの、少しだけ想いをめぐらせてほしい。



・・・読めば読むほど誰がどのような立場で書いた文章なのか、正直理解できません。JAの劇場型広告というと乱暴すぎますか？消費者の声はもっとシビアでしょう。生産者にはコメ以外の農業者も大勢いて、みんなが苦勞しています。JAは一部の意見だけ切り取ってキレイごとを並べるべきではないと思っています(怒！)。これまでコメ相場に絶対的な影響力を持っていたJAが、何か当事者意識が感じられません。だったらもっと以前にやることあったでしょって思います。

■ 地域はみんなで守るのだ

3月16日、23日の日曜日、排水路の泥上げ「江流」をしました。16日は寒風雨で2時間で断念、残りを23日1日かけてやり遂げました。一昔前は集落から大勢参加し、地区内の排水路の隅々まで江流を行うことができ、「これが終わるといよいよ田んぼ仕事が始まるな」という感じでしたが、



今は諸先輩方々はリタイヤしてしまい、半数程度で優先順位を付けてやれる範囲で何とかやり過ごしている状況です。江流を怠ると排水路に泥が堆積して水の流れが悪くなり、ついには排水路が詰まって氾濫してしまうのです。佐渡では農業生産人口が毎年100人余りも減少しており、地域の住民だけでは公共の農業施設を維持できない深刻な状態です。

ワーホリのジョーダン君も長靴を泥だらけにしながら奮闘してくれました。お礼に夜にはたっぷりビールを飲ませてやりました。彼は5月中旬まで滞在する予定で、これから種まきや田植えなど春の田んぼ仕事を満喫？してもらう予定です。



地域の仲間たちと一緒にやっているおけさ柿の園地では、冬に剪定した枝を焼きました。散らかった枝を拾い集めるのは腰が痛く重労働ではありますが、焚火は大好き。お昼には焚火を囲ってビール片手にお弁当を頬張りながら・・・これが気持ちいいんです。これからも楽しみながら地域を守っていきたいと思っています。